

西側はウクライナの破壊を望んでいる——モスクワ

<https://www.rt.com/russia/573404-ukraine-uk-depleted-uranium/>

RT

March 22, 2023

イギリスは、劣化ウラン破裂弾をウクライナに使用するという、「無鉄砲」な計画を公表している——ロシア外務省。

イギリス政府の発表した、劣化ウラン破裂弾をキエフに送り、モスクワとの戦争に使用する計画は、西側がウクライナの平和や未来を考えているという主張が、ウソであることを示している、と露外務省マリア・ザハロワ報道官は主張した。

彼女は水曜日、ラジオ Sputnik との会談で、このロンドンの声明は、国際的問題になると、米英ともに「完全な無謀さ、無責任、それに罪の回避を示す」証拠であると主張した。

彼女は、劣化ウランを含む爆薬は、より強力で、より大きな透徹能力をもつだけでなく、放射能によって土壌を汚染し、環境に永久的な害を与え、その地域に住む人々に何世代にも及ぶ影響を与えることを強調した。

「平和とか紛争の解決とか、ウクライナの未来とか、ウクライナの人々の安寧といった、我々がこれらの国（英米）から聞くすべては、ウソ、虚偽であり、国際社会を完全に誤導するものです。現実にはその目標は完全に別のものです」と、ザハロワは言った。

イギリスが、キエフ政府に対して、装甲を通す劣化ウラン破裂弾を供与する計画を通告した後では、「米英の先導する西側全体の明白な意図は、ウクライナを完全に破壊することであることに、疑問の余地はありません」と彼女は強調した。

月曜日、英防衛長官 Annabel Goldie が、「我々は〈チャレンジャー2〉主力戦車部隊をウクライナに供与したが、同時に、劣化ウランの含まれた、装甲を通す破裂団を含む、弾薬を供与する予定である」と言った。

同長官によれば、このような弾薬をキエフに送らなければならない理由は、「現代の戦車や装甲車を打ち破るのに、それが高度に有効」だからである。

ゴールドマンによるこの通告は、「もう一つのイギリスの挑発」であり、ウクライナ紛争を、新たなレベルにまでエスカレートさせるのが狙いだ、とザハロワは言った。

この通告が、中国の習近平主席とロシア大統領プーチンとの会談のための、モスクワ訪問の間に行われたのは、偶然ではない。この会談は国際的な安定と、中国のウクライナに対する平和主導に焦点が当てられている、と彼女は示唆した。

烈火ウランを含む爆弾は、現実には「核組成物を含む大量破壊兵器」だと報道官は主張し、「大量破壊兵器 (WMD) 問題は、グローバルな国際情勢の非安定化という、アングロ・サクソンの論理の一部だと、つけ加えた。

彼女はワシントンの唱えた、サダム・フセイン政府が大量破壊兵器をもっているという、根拠のない主張が、いかに、2003年のアメリカの、イラク侵略の口実となったかを思い出させた。彼女はまた、NATO が、1999年のユーゴスラビア爆撃のとき、劣化ウランをもつ爆薬を使ったことを注意させた。

「約 15 トンの劣化ウラン 238」が、その当時、ユーゴスラビア領内に落とされ、セルビアがいまだに、その影響で苦しみ、ある形の癌の記録的な症状が報告されている、とザハロワは加えた。

ウクライナへの、劣化ウラン爆弾の送りつけ通告以来、「我々はもはや、その実行の背後の活動、そのあらゆる面でのウクライナ紛争の推進者が誰かを、原理的に疑う根拠がなくなったのです。それは間違いなく、NATO を中心とする西側全体で、誰よりも米と英を頭とする者たちです」と彼女は主張した。

プーチン大統領は、火曜日にこの問題を論じたとき、もしロンドンがこの計画を押し通すつもりなら、「ロシアはそれなりに反応せざるを得ず、西側全体がすでに、核コンポーネントをもつ兵器を使い始めたものと考えざるを得ない」と言った。

英防衛省は、プーチンのこの言葉に応じて、「英軍は、装甲を破壊できる破裂弾用の劣化ウランを、何十年も使い続けてきた」と言った。この放射性金属は「標準的なコンポーネントで、核兵器ともその能力とも関係がない」と、その報道官は主張し、モスクワはこの問題について国際社会に「故意の誤情報を与えようとしている」と言った。

[訳者 Greatchain 注]

これは、岸田首相が、ウクライナへの電撃訪問を行ったばかりであり、その会談の内容いかんで、恐ろしいことになりかねず、無視することはできない。岸田氏のこれまでの言動から、この訪問が、全面的に平和や停戦のためだったとは考えられないから、この英国の動きを知って、これ以上に戦争がエスカレートするかもしれないことを、心配するとも思えない。これが恐ろしい。

困ったことは、これは即刻、停戦する以外に方法がなく、イギリスのやる決意が固ければ、ロシアはそれに応じざるを得ないことである。西側全体がイギリスを支持すれば、どうしようもなくなる。私が心配なのは、岸田氏とゼレンスキー大統領のウマが合いすぎて、誰も制止できぬ奔馬のように突っ走ることである。シーモア・ハーシュが見抜いたように、「憎しみ」が西側の理性を失わせている。これには、ロシアのマリア・ザハロワ外務省報道官の冷静さと、ウクライナ紛争の生みの親ともいえる、ビクトリア・ヌーランド女史の（真実が見えなくなる）憎しみを比較してみるべきである。⇒

http://img.rt.com/files/news/3a/10/d0/00/2644909_gayane_web.mp4?event=download